

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「メタ・コミュニケーション—社会言語科学における共通基盤を求めて—」（エディター：榎本、武黒、柳町、高梨）の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2015年11月30日（月）

掲載号の発行：2016年9月（第19巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください（本学会 HP の「学会誌」ページ参照）

タイトル：メタ・コミュニケーション—社会言語科学における共通基盤を求めて—

担当エディター： 榎本 剛士（金沢大学）
武黒 麻紀子（早稲田大学）
柳町 智治（北星学園大学）
高梨 克也（京都大学）

私たちは、相互行為の中で、ある状況や役割に特有の話し方をしたり、コミュニケーションそのものについて話したり、確かめたり、言い換えたりすることを通じて「コミュニケーションのためのコミュニケーション」、つまり、「メタ・コミュニケーション」を行っている。「今、なに話してた？」「さっきのは、冗談ですからね」「（教師が生徒に）授業中ですよ！」「（赤ちゃんに）もう、ねんね？」など、例は枚挙にいとまがない。しかも、こうしたメタ・コミュニケーションは、言語以外の動作や表情、しぐさ、声の調子、笑いとも有機的に結びついているのみならず、「ひねり」を伴って為されることもある（赤ちゃんや小さな子どもではない人に対して「もう、ねんね？」とすることさえ、できる）。

親しい間柄での日常会話は言うに及ばず、教育、職場、サービス、メディア、国会や

法廷、ロボットとの対話など、あらゆる生活場面でメタ・コミュニケーションが行われていると想像することができる。メタ・コミュニケーションについて考えることは、究極的には、相互行為とコンテキストとの多様なつながり、そしてそこにかかわる人間の社会的な姿について考えることになる。このことを踏まえて、本特集では、言語的・非言語的媒介を問わず、『言語』や『コミュニケーション』についてのコミュニケーション」として、メタ・コミュニケーションを広く定義する。そのうえで、社会を構成している、あるいは、相互行為において参与者間の社会的関係をとりにもっている様々なメタ・コミュニケーションを俯瞰的に捉え直してみたい。

上に挙げたメタ・コミュニケーションの具体例は、どちらかといえば、一部の社会言語学、談話分析、言語人類学の研究テーマになりやすいかもしれない。しかし、見方によっては、本学会で発表される研究の多くが実は、広い意味でのメタ・コミュニケーションと密接に関わっているのではなかろうか。たとえば、マルチモーダル分析では、姿勢、指さし、視線などの身体的動作と相互行為の連鎖の結びつきが研究されることがある。もしこれらの身体的動作が何らかの形で相互行為の舵取りに貢献しているとするならば、身体が発している記号がメタ・コミュニケーション的に機能していると考えられる。また、会話分析を用いた研究において、助詞・指示詞の使用や発話のシークエンスが相互行為の展開との関連で問われる時、そこには、マイクロ・レベルでのメタ・コミュニケーション過程に関する問いが含まれていると推測される。さらに、ナラティブ研究では、「引用」が問題となることがある。過去に為されたコミュニケーションの一部を取り出して、別のコミュニケーションに埋め込む行為はまさに、コミュニケーションについてのコミュニケーションである。加えて、本学会では近年、「やさしい日本語」に関する研究が進んでいる。特定の「日本語」、あるいは、それを使う人や機関、それが使われる場に「やさしさ」という価値が付与されるかぎり、ここにも「言語」や「コンテキスト」に関するコミュニケーションが介在しているのではないか。その他、社会心理学や異文化コミュニケーションの分野で扱われる「非言語コミュニケーション」も、認知や行動に影響を及ぼすメタ・コミュニケーションである。もちろん、募集する論文の研究領域やテーマは上記に限定されない。

過度な一般化は適切ではないが、人間が生きる社会言語的現実の根底において「コミュニケーションについてのコミュニケーション」が大きな役割を果たしている、という事実こそ、本学会で発表される諸々の研究が雄弁に示すところであると思われる。このことに一度、明示的に焦点を当て、身体動作から言語に対する価値づけまでを含む広範な領域として「メタ・コミュニケーション」を描き、一つの共通の土台づくりに向けた一歩とすることはできないだろうか。社会言語科学諸研究の互いの位置づけを同じ基盤の上で把握することが可能となれば、本学会が重視している「学際性」への道も拓けていくだろう。理論的考察から事例研究、研究方法批判に至るまで、本特集が多様な論文に彩られ、研究アプローチ間の相補的關係を模索するための一助となることを期待したい。